
アイドルマスター×まよチキ

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルマスター×まよチキ

【Nコード】

N2462BA

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

神が寝ぼけていた所為で死んでしまった俺は、その後訳の分からん空間におりそこでポケモン談義に花を咲かせ、その後色々頼み、アイマスとまよチキの二つの世界を併せて貰いそこへ転生することに……。まあ、楽しみましょや。 不定期更新

ポケモン談義（前書き）

思いつきで始めました。

ポケモン談義

唐突ですが、俺こと新山響にいやまきょうは、ほんの数分前に信号無視の軽に轢かれて死んだのだが、目を覚ますと何故か肉体もあり意識もハッキリしていた。しかも、傷まで無くなっていた。んでもって目の前には……なんか………こつ女将かみさんのな

「かみ違いでしょ、それは」

おつと聞こえていたいたようで。

「ていうか、聞こえてるならさっさと入って来いよ。延々モノログかと思っただろ、こんボケ」

「私が悪いの？」

「知らん」

女将さんが溜息をついた。

「まあ、あまり動揺とかしてないみたいだし、本題に入るよ？」

「ウイ」

「死んだのは分かってる？」

「ウイ」

「ごめん。それ、私の所為」

「ウ………はい!？」

あまりにも軽く言われて危うく流す所だったぞ。

あ、ちなみに俺は生粋の日本人なんで、髪も目も黒だべよ。後高
校生。

「いやね？ ホントはあの車が信号を無視することも、もちろんあんたが死ぬことも無かったんだけど……………昨日遅くまでゲームしてて、寝ぼけてたみたいでさ……………いや、ホントごめんね？」

この女将さんは正反対の真つ白な髪してて、目は蒼。身長は百六十くらいかな？ あ、俺は百七十。

「女将さんもゲームとかするんだな？」

「あ、聞く所そこなんだ？ まあ、いいや。ほら、昔やってたゲームをやり出すと止まらないことってない？」

「あ、あるある。なんか夢中になるよな？」

「でしょ？ で、ポケモンのサファイアを発見してね？ やってみたら面白くってさあ……………あんたは最初のポケモン何にした？ 私はミスゴロウ」

「俺はキモリだったな……………でも、アスナの所は苦労した」

「あ……………炎タイプだもんね。砂漠で地面タイプ捕まえてもそこから育てるのって面倒だし」

「そうなんだよなあ……………まあ、最初のジムはかなり簡単に済むんだけど」

「そこはミスゴロウも同じよね？ なんてったって水タイプだし。でね？ 思うんだけど、岩タイプって弱点多すぎない？」

「それはホントに思うよ。鋼・水・草・地面・格闘の五つもあるんだからな……………そう考えるとあれでジムリーダーになるって凄いよね？」

「そうよね……………あ、後さ、あの四体は共通して格闘が弱点よね？」

「レジ兄弟だろ？ なんてだろうな？ 考えるのが面倒だったのかな？」

「どうなんだろう……………あ、他にもやったことあるポケモンシリーズって何がある？」

「えつとな……金・銀・クリスタル・ルビー・サファイア・エメラルド・ダイヤモンド・パール・プラチナ・ブラック……この辺りだな」

「結構やってるのね？」

「ああ。それでさ、プラチナって、ディアルガとパルキアの両方が出るだろ？」

「ええ。捕まえるの結構大変だったわ」

「俺もパルキアは苦労したんだけどさ、ディアルガはモンスターボール一発でゲット出来た」

「うそ!？」

俺の言葉に異様な反応を示し、女将さんは詰め寄って来た。て…：近くで見ると可愛いな。顔のパーツはどれも整ってるし、なんか良い匂いもする。

「ねえ、それ本当なの!？」

「あ? あ、ああ。ガブリアスの地震でな、半分位減って、投げたみたらゲット出来た。いやあ、ビックリしたよ。思わず二度見しちゃった」

思考を振り払って答えれば、女将さんは興奮した様子で俺の手を握ってきた。そこまでか？

「それで? とりあえずポケモン談義は置いてといてさ」

「あ、そうだった……これからのことなんだけど、貴方はどうしたい?」

「と、言つと?」

女将さんは俺から少し離れて座った。

「私の所為で、貴方は死んだから……元的生活に戻すことは出来ないんだけど、別の世界に送ることな出来るの。それから、お詫びとして何かお願いがあるなら、可能な限り叶えることも出来るんだけど」

「なるほど……じゃあ、とりあえず一つ目の願いとして、俺を轢いた車の運転手が俺を轢いてないことにしてくれ。近くで遊んでた子どものボールに突撃したとか、そんなんでいいからさ」

俺はもう死んでる訳で戻すことも出来ないなら、結果を変えても俺がここにいることは変わらないだろうしな。あの近くには公園もあつたから、それで問題ない筈だ。

「え？ いいけど、どうして？」

「運転手だつて、あんたが寝ぼけてた所為で俺を轢いちゃったんだろ？ それじゃ、そいつのこの先の人生お先真っ暗じゃねえか。そんなのはご免だ」

「あ……ごめん」

「謝らなくてもいい。結果を変えてくれたらそれで」

謝る女将さんの頭を撫でると、小さく頷いた。

「それから、ついでに俺の存在を無かったことにしてくれ。そうしないと不自然になるからな」

「え！ そんな、どうして!？」

急に頭を上げたことで、俺の手が離れた。

「結果を変えて、俺が死んでないことになった。でも、俺はここにいる。それなら、死ぬ前の俺はどこに行ったんだって、なるだろ？ そうすると親父とお袋、特に妹が心配しちゃうし。家族を心配さ

せたくないからな」

「でも、友達とかの記憶からも消えるよ？」

「構わないって……ってどうか友達いねえし……それで？ 出来るか？」

「もちろん……できるけど」

「じゃ、まずはそれを頼む」

「……………」

女将さんは暫く黙り込んだが、やがて無言で頷き立ち上がった。

そして目を閉じると、何かを呟き始めそれもすぐに終り、目を開いた。

「……………終わったよ？」

「おう。サンキュ……………て、どうした？」

女将さんは、何か沈痛な面持ちをしていた。

「本当に良かったの？」

「ああ。で、次んだけど、さつき別の世界に送ることは出来るって言ったよな？」

「うん」

「それってさ、別々の世界を一つにすることも出来るのか？」

「え……………あ、世界観が近いなら、出来ないことはないけど」

「じゃあさ、『アイマス』と『まよチキ』。この二つを併せることってできるか？ 世界観も近いだろ？」

「うん。それなら出来る。でも、どうしてその二つ？」

「いや、どっちの世界にも行ってみたいなく、って思ってたさ」

あの二つがもし同じ世界で起こってたらどうなってるのか、って考えると結構面白い気がするし。

「そうなんだ……うん、それは、貴方を送るのと同時にやっておくわ。家族はどうする?」

「いい。捨てられたってことにしてくれ。死ぬってのは、いくらなんでも嫌だしな」

「そんな……そこからどうするの?」

「あんたの力なら、なんとか出来るだろ? まあ、細かいことは任せる」

「……分かった。他には?」

「『如月優』の死が起きない様にしてくれ。あ、でも、765プロに所属するのは変えないで。これくらいで頼む」

「分かった。それじゃ、早速送るね?」

「ああ。楽しかったよ」

「私も楽しかった」

まさか、死んだ後にあんなにポケモンの話しに花が咲くとは思ってなかったしな……女将さんも喜んでくれたみたいで何よりだ。

「お? なんか、急に眠気が……」

「大丈夫。目を覚ましたら、貴方の希望通りの世界にいるから」

「そ……か……」

駄目だ。強すぎて何も言えん。

「バイバイ、響。またね?」

意識を失う寸前に見えたのは、笑いながらそつ言つて手を振る女将さんだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2462ba/>

アイドルマスター×まよチキ

2012年1月6日09時50分発行